

佳作賞

「三伏の候」

『せる』86号

泉りょう氏

泉りょう（いずみ・りょう）

一九五二年、大阪生まれ。

一九七五年、龍谷大学文学部卒業。

図書館勤務を経て現在は専業主婦。

地元で読書会を主宰。

大阪文学学校研究科修了。

「グループせる」会員。

「あべの文学」の母体である「A批評会」の事務局を五年務める。

大阪女性文芸協会理事。

今一度初心に帰り

このたびは第五回神戸エルマール文学賞佳作に選んでいただきまして、ありがとうございます。

二十代の頃から細々と書き続けてきました。思い起こせば、若い頃は、ただただ小説への渴望のみに突き動かされてきました。誰かに認めてもらいたいというような野心は、まったく持ち得ず、そんな自信も余裕もありませんでした。子育てに追われる時期を過ぎ、中年と言われる年頃になった頃、人に薦められてある文学賞に応募しました。それが最終候補に残ったことで、俄然欲に目覚めました。以来いくつかの地方文学賞に応募し、最終候補作になったのが二回、四次選考通過が一回、というのがこれまでの戦歴です。

今回、初めて賞をいただきました。憧れのエルマール文学賞佳作。お知らせをいただいた時、今まで負け癖がついているせいか、俄には信じられませんでした。しばらくしてじわじわと喜びが湧き上がってきたのですが、それ以上に責任感のようなものがずしりとのしかかってきました。なるほど受賞の重みとはこういうものなのか、と知りました。

来年は還暦です。今一度初心に帰り、力のこもった作品

を書いていかねば、と思っております。それがこのたびを選んでくださった方々、運営にご尽力くださった方々への、私にできる唯一の返礼であると存じます。

ほんとうにありがとうございます。

作品概要

山村ミチルは現在七十歳。今のマンションに引っ越してきて十年が経つ。

盛夏。マンション裏の路地の女たちの声高な話し声で目覚めたミチルは、のろのろと起き上がり、テレビをつけた。毎朝テレビの画面が立ち上がる瞬間、ミチルの胸はざわつく。いつものアナウンサーが現れ「今日で世界は終わりました」と告げるのではないかと、どこか期待に似た気持ちで待っているのだ。

マンションの購入に手持ち金をつぎ込んだミチルは、管理費等の滞納で管理会社から督促を受けるほどに行き詰っていた。

デパートが主催する「盛夏の呉服まつり」のアドバイザーの仕事のため、ミチルは絹の着物に着替えて外出する。この着物は、出店している呉服店の若社長から、雇ってやるからと、なかば強引に買わされた。着付け教室講師の職を失ったからのミチルは、このような不安定な単発の仕事で、かろうじて収入を得ていた。

朝一番の客は、五十代とおぼしき女で、ミチルはその女に夏大島を売ることができた。が結局、それ以外何も売れないまま、催事は終わる。管理会社からの督促に身を潜めるように暮らしているところに、先の若社長から電話が入る。夏大島の女がキャンセルを言ってきたという。叶わぬ旨を告げたところ、女はミチルに会わせてくれと言ってきたかぬらしい。一度だけ女に会って説得してほしいという若社長の頼みを断りきれず、ミチルは女に会うことになる。

女の家は高級住宅地にありながら、どこか荒れたさまで、女は夏大島を着て現れる。ネットオークションで中古品を買ったという女は、ミチルと一緒に商売をしないかと持ちかける。女はインターネットで中古品の着物を買った漁った挙句、夏大島に支払う金をなくしていたのだ。

女の一方的な言い分に、疲れ果てたミチルは窓の外へ首をめぐらせる。おもては炎天下。きつと地獄のような暑さなのだろうとミチルは思う。軒先に植えられた観音竹に、蟬が一匹かじりついて羽を震わせている。鳴いているのだろうか。その声はここには届かない。

行き暮れる二人の女。三伏の候。